

〈平成十三年度卒業論文から〉

江戸期飾り櫛のデザインとその特質

——雛形本と浮世絵を中心として——（要旨）

栗田 佳世子

江戸時代に入り、女性の髪形がそれまでの垂髪から結髪へと大きく変化した。そして結髪が一般にまで定着し発展するのに伴い、それまで結髪道具に過ぎなかった櫛や筭も徐々に装飾性を増し、装飾品としての役割を求められるようになっていった。当初遊女や大名の奥方といった一部の女性しか身につけることの無かった髪飾りも、江戸中期以降には一般市民にまで広く普及、発展していった。

それら櫛・筭などの髪飾りについて述べた研究はあるが、伝世資料の年代判定が極めて困難であることから、いずれも記述資料をもとにした検討にとどまり、変遷について実証的に論じるものはほとんど知られていない。櫛の造形要素である素材・制作技法・デザインは非常に多彩で、伝世資料の中には美術工芸の域にまで達していると思われるものも少なくない。先行研究では記述資料を元にしているためか、主に櫛の素材や制作技法を中心に述べられており、デザインの特色やその推移についてはあまり論じられて来なかったといえる。しかし、櫛の装飾的機能を考えると、デザインの変遷、つまり櫛の装飾性の推移を調べることは基本的に重要であり、まず調査・整理する必要があると考えた。

そこで本論考では今までほとんど取り上げられることのなかった、当時のデザインブックとしての雛形本と人物描写にくわしい浮世絵などの絵画資料を取り上げ、さらに制作者が明確な櫛の伝世資料を手掛かりに櫛のデザインの変遷と、櫛が髪飾りの中でどのような位置づけをされていたかについて考察を試みた。雛形本は年代順に『友禪雛形』（1688年）、『時絵井草』（1705年）、『時絵大全』（1759年）、『今様櫛きん雛形』（1822年）の雛形、全231点を観察した。また浮世絵に関しては櫛が形の描写のみの作品が多いが、浮世絵師の中でも比較的櫛の描写が精緻である江戸後期の浮世絵師、溪斎英泉（1791～1848）と歌川国貞（1786～1864）の浮世絵を取り上げた。伝世資料は江戸時代後期から幕末にかけての間に活躍した時絵師と牙彫り師の作品21点を観察した。

以上の資料を整理・照合した結果、主に江戸後期において櫛のデザインの変化は比較的緩やかであり、とくに古典文学意匠が数多く見られるのは、櫛の製作技法にも関連があるのではないかと考えられた。それは技法が伝統的な意匠を保つ時絵によることが多かったため、櫛は古典的な定型化されたデザインを踏襲する。側面をもち、またそのような性格を担っていたのではないだろうか。そのように伝統的なデザイン様式を保持している櫛は、変化の激しい髪形と髪飾りの中において、見るものに安定感を与え、櫛は髪と髪飾りの中で中心的な装飾機能を発揮する確固とした位置にあったのではないだろうか。

（メリーチョコレートカムパニー）